

## 法医国際学会の夏

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/9222">http://hdl.handle.net/2297/9222</a>

## 法医学国際学会の夏

The Summer in 1996 as The High Season for  
International Meeting of Legal Medicine金沢大学医学部法医学講座  
大 島 徹

アトランタオリンピック、病原性大腸菌 O-157 の蔓延、そして「寅さん」の死と1996年の夏もいろいろな事があった過ぎて行ったが、日本の法医学にとっても一つの記念すべき夏になった。すなわち、8月19日から23日までは熊本で第4回国際警察医・臨床法医学会(会長 熊本大 恒成教授)が、22日から24日は箱根でDNA多型についての国際シンポジウム(会長 大阪医大 松本名誉教授)が開催され、引き続き26日から30日までは東京で第14回国際法科学会(会長 東大 高取教授)が、そして締め括りの大阪での第3回国際法医学シンポジウム(9月2日-4日、会長 阪大 若杉教授)と、たて続けに国際学会が開かれた。昨今、日本で国際学会が開かれるのは珍しくはないが、4つの国際学会が連続的に行われたことは日本の法医学にとっての一大イベントであり、資金面など関係者の苦労は大変なものであったが予想以上に実り多い結果をもたらした。

私自身の最初の国際学会は、まだ大学院生であった1985年のハンガリー・ブダペストでの国際法医学・社会医学会議であった。当時のハンガリーは未だ共産党政権で東側に属しており、西側では感じられない一種独特の雰囲気を経験することができ、ハンガリーの文化・風土とともに忘れられない思い出である。

さて、国際学会は当然のことながら自己の研究発表の場であり、研究方法や成績などを呈示し、活発な議論を通じて学問の厳しさや楽しさを学ぶ絶好の場であることは言うまでもない。また、発表後のフロアやレセプションでの個人的な交流も他では得がたい経験となる。特に食事やアルコールでリラックスすると、各国の研究の本音が聞かれて興味深い。経験上、このようなときは出来るだけ長い時間話に加わり、思い切って“相手の懐”に飛び込んでみることが大事であるように思う。このようなときに得られた知己は思ったよりも長続きし、その後、個人的交流が学問的交流にまで発展するのはうれしい。

今年の日本での国際学会でも何人かの友人に再会することが出来た。その一人、ドイツ・リュベック医科大学のエーミヒェン教授は温厚、誠実な人柄の法医学病理学のエキスパートで、私のケルン留学当時から大変、御

世話になっている。彼とは共同研究の話があり、本学の医学部でも学生にSIDS(乳児突然死症候群)における神経病理学的所見の講義をしてもらった。また、教室の大学院生を来年受け入れてもらう話もまとまった。

さらに、現在、当教室の権講師が留学しているミュンヘン大学のアイゼンメンガー教授は、ドイツ法医学会の大物だが、彼とも共同研究の打ち合わせを行い、楽しく議論した。

また、リトアニアのガルス教授とは1990年の金沢での第1回国際法医学シンポジウムで知り合い、「Anthony」、「Tohru」とファーストネームで呼び合っている。リトアニアの経済事情はなおも厳しく、参加にあたっては若杉教授と私がスポンサーになった。大柄で厳ついが憎めない性格である。いつも、リトアニアに來いと言われていたが、近いうちにこの約束を守らねばならないようである。

今年は日本国内での開催であったが、海外に行けば可能な限り時間を見つけて、普段忙しくてなかなか出来ないことに手を伸ばす。私の場合はコンサートやオペラ、博物館や動物園、そしてその土地の美味しい喫茶店に入る位だが、このような機会に大きな思い出となることに会うこともある。特に、1993年の第2回国際法医学シンポジウムの折に出かけたベルリン芸術週間初日の、ベルリンフィルによるマーラーの「大地の歌」はいまでも強く印象に残っている名演奏であった。当日、初日ということで地元テレビ局の女性アナウンサーから会場の入口でインタビューを受けたが、夜のニュースでは案の定、私のインタビューは没になっていた。

今年の4つの国際学会の成功で日本の法医学会の面目は一応は保たれたわけだが、若手研究者の育成や実務能力の総合的向上など、学会に課せられた課題は少なくない。近い将来はマルチメディアの発展により研究室に居ながらにして参加する国際学会も増えるであろうが、ダイレクトな人と人との交流、そして趣味に時間の割けない研究者に貴重な息抜きを与える効果を考えるなら、経済的負担はつらいところだが、研究者が一堂に会する国際学会はやはり無くなって欲しくない。